論　文　要　旨

学位論文題目　　ロサリオ・カステリャノス研究―錯綜する周縁化を生きて―

氏　名　　洲崎　圭子

本研究は、20 世紀半ば、近代国民国家の建設を急いだメキシコで、上層階級出身の知識人女性作家として、一貫して家父長制度に疎外される多様な女性の状況を描いたロサリオ・カステリャノス Rosario Castellanos（1925～1974）の、第三世界におけるフェミニスト作家としての功績を明らかにすることを目的としている。

大農園主を父にもつ上層階級出身のカステリャノスは、当時としては珍しく高等教育を受ける機会に恵まれ、大学院を修了して執筆活動を続けるなかで、政府機関職員、教授、外交官など、社会的に認められた職を歴任したエリートであった。農園社会で育ったのちに地方と首都を行き来し、留学や海外滞在も経験するなど、先住民世界／白人世界、地方／都会、第一世界／第三世界、政府側／大衆側といったさまざまな境界を往来したカステリャノスは、詩、エッセイ、戯曲に加え、先住民世界や女性を扱った小説作品を発表した。メキシコをはじめラテンアメリカ諸国において作家活動を行うことは、ときに人権侵害を伴う。当局による検閲はもとより、拉致や拷問もまれではなく、そのような状況下、カステリャノスは具体性を伴わない当局の女性政策を批判した一方で、大統領を擁護する政権寄りの作品も書いている。この曖昧ともとれる姿勢には、メキシコ人女性で上層階級出身の知識人であるという複雑な立場を反映した政治性を読み取ることができる。当時のメキシコにおける知識人を取り巻く状況と、カステリャノス本人の出自に着目した上で、作品に描かれる抑圧された女性登場人物たちを検討した先行研究はなく、それらを包括的に考察することで、現代メキシコ文学におけるカステリャノスの位置を改めて明らかにし、再評価することが本研究の意義である。

本研究は二部構成をとり、第一部では、第三世界と呼ばれたメキシコで、カステリャノスが女性問題を主テーマとするようになった経緯について検証する。第 1 章では、ラテンアメリカにおける知識人と政権との関わりについて考察し、上層階級出身の女性の知識人としてのカステリャノスの複雑な立場を論じる。第 2 章においては、カステリャノスの先住民に対する考え方を検討する。地方の農園主の娘として、農園や先住民の関係性や双方の立場を目撃した経験は、後の作品の造形に大きく資することと

なった。第 3 章では、修士論文や後の小説作品のテーマ設定などから、カステリャノスが一貫して周縁化された女性をテーマにしていたことを明らかにする。

こうした第一部を踏まえて第二部では、彼女の小説作品における女性人物たちを取り上げ分析する。第 4 章では、最初の長編小説『バルン・カナン』（1957）で、旧態依然とした価値観に左右される地方の農園をとりまく女性たちの生きにくさが、階級や人種問題を交差させた複眼的な視点から描かれていることを検証し、彼女の作品が、第三世界特有の問題を分節化しうるフェミニズムの発信であったことを確認する。第 5 章は、マチスモ言説について歴史的経緯を検証したのち、『バルン・カナン』の農園主の振る舞いを分析し、男女がともにジェンダー規範に縛られていたことを論じる。第 6 章では、『バルン・カナン』において農園主一族の「独身女性」の中絶事件に着目し、「独身女性」の疎外感が前景化する様を確認する。第 7 章では、短編小説『八月の招待客』（1964）において、さらに上層階級特有の「独身女性」という存在について検討し、中・下層とは異なり自己実現の手段をもたない周縁化された女性の存在を確認する。第 8 章では、長編小説『真夜中の祈り』（1962）から、子を持たずしては存在価値を認められない女性たちを検討、家父長制に抑圧される再生産の制度が問題化されることを指摘する。

カステリャノスは、上層階級に属する知識人であったが、同時に、男性優位の家父長社会にあっては周縁に追いやられた女性でもあった。幼少時、農園主一族のなかで跡継ぎとしては扱われることのない女子として、常に疎外感を味わう経験をして以来、彼女の足場は、支配する側とされる側の両方にあり、かつ双方を巡って往還していた

本研究は、メキシコ社会のさまざまな境界線上を往来して、作品を書き続けたロサリオ・カステリャノスの功績を明らかにしたものである。メキシコ社会で周縁化される女性の問題を常に描いたカステリャノスの作品は、第三世界に特有の人種や階級といった条件を反映した家父長制度の抑圧を分節化する。こうしたメキシコ特有の社会的・歴史的文脈のなかで作家および作品をあらためて検討することにより、カステリャノスを、第三世界から女性にまつわる問題を発信し続けたフェミニスト作家として再度位置づけることが可能となった。